１４

由紀は自宅に戻ってからも激しい疲れを感じて何も手に付かなくなっていた。靖さんとも挨拶もそこそこに帰宅したのだった。

申し出を断ればこのプレッシャーから逃れられるのに・・・。

考えてる自分がいるのだ。この途方も無い申し出を。何を考えてるのか、何を悩んでるのか・・・。

新聞記者として頑張ってきて、これからもそれなりに仕事をして、いい人とめぐり合えれば結婚をして、家庭を築き、子供も授かれば嬉しいし、別に自分には野望はないし・・・。

運命の人のような気がしていた靖さんと知り合ったために、こんな有り得ない話に考え込んでいる自分がいる。ああ、私も人生相談に手紙を出してみたいよ。

回答者だったらどうに答えるだろうか。ふぅ、馬鹿馬鹿しい話で回答する方など居ないだろう。でももし、自分が第三者の回答者だったら客観的にどう答えるのだろう。

――　おやおや、大変なご相談です。あ、失礼。平凡な人類として生きるか、それとも“宇宙人”として生きるか。二者択一なのですね。問題は何か、それを書き出す事で頭の整理ができるはずです。まず、根本的に悩んでいると言う事はその申し出に何か魅力を感じてるのでしょうか。野望は無いと思ってる自分とは違うもう一人の自分がいるのかもしれませんね。でも本当に“彼女”の能力だけが貰えるのだろうか。もし自分の心まで乗っ取られたら体は私でも意識は“彼女”になってしまう。そんな危惧があるのでしょう。たった一回会っただけの“宇宙人”を信用するなど有り得ないですものね。私が言えることはやはり、断った方が良いという事になってしまいます。突き詰めれば人間止めますか、それとも的な所に行き着いてしまいます。でも、最終決断するのはあなたです。

　由紀は自分あてに回答を出してみた。回答と言えるのだろうか。止めた方が良いとの方向は示せた。しかし、でも・・・、が付いてきてしまう。自分は今までギャンブルなどはした事がなかった。まあ強いて言えば宝くじを買ったくらいで、しかも高額など、当たった試しも無い。いわば人間か宇宙人かなどというギャンブルだ。とてもじゃないけれどそんな賭けには出られそうも無い。ほぼ結論は出たような気がした。当然だろうけれどもやはり断ろうと由紀は思った。

　と、ここで“宇宙人”の秘密を知ってしまった自分はどうなるのだろうと気付いた。靖さんは利益を得てるから“彼女”は安心してるのかもしれないが、私は大変な秘密を知ってしまっただけで、まだ何の得も無いからどうに思われるのか。口外しないようにとの脅しを掛けてるから大丈夫だろうと思っていてくれるとは思うのだが・・・。申し出を断らないで進むのもリスクが大きすぎるけれど、断った時のあらぬ不安が頭をもたげて来た。取り越し苦労であって欲しい。

　靖さんには知られていないから、申し出を断りこの話を闇から闇へ葬り去ろう・・・。気持ちが固まった由紀は幾分か落ち着いてきたようだ。靖さんも普通の平凡な人間に戻ってもらった方が由紀としては安心して付き合える気がしてきた。お金や地位よりも心の平安が一番のような気がしてきていた。

１５

“宇宙人の彼女”は由紀さんから断られてかなりショックだった。当然相談する相手はいない。靖には内緒の話だった。“野望”のようなものが芽生えていた彼女はこの気持ちをコントロールするのに困っていた。この“野心”を受け継いでくれる人は居ないものだろうか。知り合いはいないし、由紀さんには断られてしまった。そしてあとは靖さんしか居ない事に思い至った。そこで靖さんへ由紀さんに申し出た内容と同様な思念を送ってみた。

当然だが靖は面食らった。

「あなたのその能力を受け継いで私が“宇宙人”になれって事ですか」

“あなたと二人三脚でやって来ましたが、あなたが私の能力を備えれば動きやすいのではないでしょうか”

「成るほど。でも何故今更そんな事を考えてきたのですか」

“隠れているのが少し嫌になったのでしょうか”

「でも何故私なのでしょう・・・」

“野心に突き動かされてしまっていて、他に相談できる人がいないのです”

「でも、あなたは居なくなってしまう訳でしょう」

“あなたの意志の中にほんの少しだけ私を存在させてください”

「・・・？・・・そう・・・なんですか・・・」

“無理な相談でしょうか”

「まあ、君とは長い付き合いだから、それにいい思いもさせてもらったし。無碍には断れないけれど。でも言葉とか食生活とかはどうになるのでしょうか」

“言葉は使えるためには、電波情報を受ける力とか思念を送る力を削ればそこに言語能力を入れられると思います。食生活は私と同様になるかと”

「言葉の能力は出来るかもで、食事はプラスチックですか・・・」

“でもそのマイナスを遥かに上回る力を手に入れられるわけですよ。お金は勿論の事、地位や名声あらゆるものが手に入るかもしれないのですよ”

「“宇宙人”になればそれらを自分が手に入れられるかもしれない・・・、ですか。魅力的にも感じますし、でも余りにも危険な冒険とも思えますし」

“冒険の出来ない方なんですか。確かに地道に暮らしていった方が平和かもしれないですよね”

「そう言えばあなたは人の体を借りてるようですが、元はどんな暮らしをしていたのですか」

“そうですよね。私というか、この体の人は人知れぬ場所で自死されてた方です”

「そうだったのですか。それでは私とは条件を較べようがありませんね。私に申し出たような生きてる人間に“宇宙人になって”とは言った事はまだ無いのですか」

“あ、ええ。まあ・・・”

「んっ？あるのですか？」

“はい、正直に言いますとあります。でも残念ながら断られました”

「ですよね、でもそれっていつ頃の話ですか」

“そうですねえ、随分前の話です”

「そういう申し出をしたと言う事はあなたの秘密を知ってしまったのでしょうが、その方はその後どうされたのですか」

“別にどうもなっていませんよ”

「秘密をばらされるとか、その辺は大丈夫なんですか」

“大丈夫のはずです。”

「そう言い切れるのですか、心配じゃあないのですか」

“大丈夫のはずですが、そう言われると逆に心配になってきますが”

「意外にゆるいのですね。まあ、でも昔の話ならもう問題はないのでしょうけどもね」

“すみません、少し嘘をついていました。昔の話ではなくてつい最近の話なんです”

「えっ？・・・と言う事はその相手ってまさか由紀さんなんですか」

“はい”

「えー！！あの日、自分が席を外した時にそんなことを言っていたのですか・・・」

“はい、ごめんなさい。由紀さんには申し訳ない事をしたと思ってるんです”

「どうしたんですか、何を焦っているのですか」

“確かに、どうかしていますよね”

“彼女”は本当の理由は言わなかった。そろそろこの借り物の肉体が限界に来ている事を。

“野心”の膨張と肉体の供給のはざ間で・・・。

そして靖は未来が聴こえる本物の預言者になってしまうのだろうか・・・。